

『潜夫論』志氏姓考辨  
- 『世本』との関連性をめぐる一考察-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 弘喆 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22033">http://hdl.handle.net/10291/22033</a>

## 『潜夫論』志氏姓考辨

### —『世本』との関連性をめぐる一考察—

李 弘 喆

**要旨** 本稿は『潜夫論』志氏姓と『世本』との引用関係の前提とされるものを検証した上で、あらためて両者の間に存在する関係を検討し、後漢時代における世系記載の利用状況にあわせ、志氏姓の原資料とされる「世記」の実態を考察した。

まず志氏姓の『箋校正』に「引」かれる『世本』佚文を蒐集し、そのあり方・役割を分析した。『箋文』にみえる『世本』佚文が全て他の引用先に由来し、『箋校正』は決して『世本』及びその輯本を引用していないことを判明した。これまで想定されてきた志氏姓が『世本』を参照しているという見解を生み出した思考のプロセス自体は成立し得ないと指摘した。

また、志氏姓の孔子世系と『世本』佚文などの孔子世系との関連性を検討した。『世本』佚文の孔子世系の欠落を考証し、唐代初期に五経正義の編纂段階でその欠落が確認されたことを示し、志氏姓・『世本』の孔子世系の間には同じ原資料を共有していると指摘した。

さらに志氏姓が参照している「世記」と『世本』との関係を検証するために、両者の氏姓関係の記載を比較した結果、多数の情報が共有されており、相反する内容が存在しないことを指摘した。両者は直接的な引用関係があるとは断言できないものの、関連性が存在することを否定できる証拠は全く見当たらない。

最後に第一章から第三章に至るまでの検証結果を踏まえて、後漢時代における世系記載の利用状況にあわせて、志氏姓が参照している「世記」は特定の書物ではなく、広義の「世系資料」の汎称であるという結論に達した。

この一連の考察によって、『箋校正』への誤認による「志氏姓が『世本』を参照している」という誤った先入観を否定し、あらためて両者の間に存在するあらゆる関連性を示し、志氏姓ないし『潜夫論』の文献学的基礎研究の最初の一步を踏み出した。

**キーワード**：『潜夫論』、『世本』、世記、世系、氏姓

## はじめに

後漢時代の王符<sup>(1)</sup>の『潜夫論』は中国古代思想史研究の重要な資料の一つとしてよく知られており、主に王符の持つ法家的思想、あるいはその天人相関説についての態度が注目されている<sup>(2)</sup>。ところで、『潜夫論』には「志氏姓」篇<sup>(3)</sup>があり、『新唐書』柳沖伝によれば、「志氏姓」は「鄧氏官譜」・『風俗通義』「姓氏<sup>(4)</sup>」篇に続き、譜学の基本的テキストの一つと認識されている<sup>(5)</sup>。

言うまでもなく、譜学の成立は、譜学に用いられた文献の成書とは別問題である。譜学の発生・発展の背景には社会構造の変化が窺え、その確立は南北朝時代まで下ると考えられている。後漢に至るまで、古帝王を扱う文献はかなり豊富であるが、氏姓の展開を詳細に語るものは乏しい。『漢書』芸文志<sup>(6)</sup>には譜牒の門類がなく、術数類曆譜には書名より系譜と推測されるものが僅かにみえるが、今日に伝わるものがなく、その内容は不明である。『白虎通』には姓名の篇はみえるが、個々の氏姓にまで詳しく言及するものではない。故に志氏姓は譜学の興起に先行する系譜の実態を検討する貴重な資料であることが了解される。

志氏姓は譜牒には言及していないが、文末においては「略觀世記、采經書、依國土」と参考したものを挙げている。「世記」という書名は典籍に見えず、芸文志にみえる『世本』<sup>(7)</sup>に類似するもの、あるいは『世本』そのものを指しているのではないかと容易に連想される。

現行の『潜夫論』を扱う場合は、彭鐸が校正を加えた清代の汪繼培（1751～1819）の箋<sup>(8)</sup>の見解を踏まえた上で考察を進めることが一般的である。実は志氏姓の『箋校正』において、世系・氏姓関係の『世本』佚文が頻見される。以前、筆者は別の論文を投稿した際、「汪箋に『世本』が多数引かれてあることから明らかなごとく、志氏姓篇が基本的に『世本』に依拠していることは誰にでも容易に推定できることである」という査読意見を受けた。この見解は極めて典型的であり、『箋校正』が『世本』佚文を頻繁に利用している以上、志氏姓が『世本』に依拠していると誰でも思っていると決して過言ではない。

しかし、志氏姓と『世本』との関係を検討する前に、その「自明の前提」とされる、『箋校正』にみえる多くの『世本』佚文のあり方、延いては箋文としての役割に対する考察は、目下のところ一つもないのである。果たして志氏姓の原資料と考えられる「世記」は『世本』そのものなのか。志氏姓が古くから譜学の基本的テキストの一つと認識されているにもかかわらず、それにまつわる文献学的基礎研究はまだまだ検討すらされていない。

本稿は志氏姓と『世本』との関係の「前提」とされるものを検証した上で、あらためて両者の間に存在する関係を明らかにし、後漢時代における世系記載の利用状況にあわせ、志氏姓の原資料とされる「世記」の実態に迫る。第一章においては、志氏姓の『箋校正』にみえる『世本』佚文を蒐集し、その傾向を分析した上で箋文としてのあり方・役割を明らかにし、これま

での認識を検証する。第二章においては、志氏姓・『世本』佚文をはじめ、複数の文献にみえる孔子系譜に焦点を当て、まず世系記載の分析を通じて、志氏姓と『世本』との関係を探る。第三章においては、第二章に引き続き、志氏姓に記載されている氏姓記載と現存の『世本』輯本の系譜関係の記載との比較分析を行い、矛盾の有無を確認する。第四章においては、後漢時代における世系記載の利用状況を示した上で、志氏姓の原資料とされる「世記」の実態を明らかにする。

なお、テキストの分析作業においては、原文の表現をそのまま提示する必要がある。そのため本稿では訓読は行わない。

### 一. 『箋校正』にみえる『世本』佚文の本質

本題に入る前に、まず、志氏姓の記述の構成を簡単に紹介しておこう。その記述の内容を順番に並べると、以下のようになる。

- A 伏羲（風姓）
- B 炎帝（姜姓）
- C 黄帝（姬姓以外）
- D 顓頊
  - (a) 重黎
  - (b) 祝融 (1) 半姓以外 (2) 楚（半姓）
  - (c) 高陽（嬴姓）(1) 秦趙遠祖 (2) 趙 (3) 秦
- E 帝堯
- F 帝舜（媯姓）
- G 殷（子姓）
- H 周（姬姓）
  - (a) 魯
  - (b) 衛
  - (c) 晋 (1) 晋之公族 (2) 韓 (3) 魏
  - (d) 鄭
  - (e) 吳
- I 姬姓以外
  - (a) 鄭大夫
  - (b) 晋大夫
- J 大吉<sup>(9)</sup>之姓
- K 殷氏之旧族
- L 周室之世公卿家

上述のごとく、志氏姓は太古より戦国時代に至るまでの世系や氏姓を記すものである。このような一篇を説明する『箋校正』の文には『世本』佚文が頻見される。『世本』佚文はいかに引用され、箋文としていかなる役割を果たしたか。それを検証するために、『箋校正』に「引」かれている『世本』佚文を整理して表1に示す。

表1 志氏姓『箋校正』にみえる『世本』佚文一覽<sup>(10)</sup>

	『箋校正』文	引用先
1	水經注廿三陰溝水篇引世本云、許、州、向申、姜姓也、炎帝後。	水經注
2	古今姓氏書辯証引世本云、齊頃公生子夏勝、以所居門衛雍門氏。	古今姓氏書辯証
3	古今姓氏書辯証引世本云、齊惠公公子子襄之後。	古今姓氏書辯証
4	古今姓氏書辯証子泉氏引世本云、齊頃公生子泉、因氏焉。	古今姓氏書辯証
5	古今姓氏書辯証引世本云、齊頃公公子子乾之後、以王父字為氏。春秋時有子乾哲。	古今姓氏書辯証
6	氏族略引世本云、公子都字子乾。	氏族略
7	隱二年左傳疏稱、譜云、莒、嬴氏。少昊之後。引世本、莒自紀公以下為己氏。	左伝正義
8	隱十一年左傳疏云、世本氏姓篇云、任姓、謝章薛舒呂祝終泉畢過。言此十國皆任姓也。	左伝正義
9	隱五年左傳疏引世本云、燕國、姁姓。	左伝正義
10	周語韋昭注引世本云、密須、姁姓。	國語韋昭注
11	按史記楚世家索隱引世本、斟亦作斯。	史記
12	莊五年左傳疏引杜氏族譜云、…又引世本注云、邾顏別封小子肥於邾、為小邾子。	左伝正義
13	元和姓纂引世本云、楚若敖生楚季、因氏焉。	元和姓纂
14	氏族略引世本云、若敖生鬬強、因氏焉。	元和姓纂
15	元和姓纂引世本云、楚鬬廉生季融、子孫氏焉。	元和姓纂
16	古今姓氏書辯証引世本云、楚公族。	古今姓氏書辯証
17	昭十七年左傳…疏引世本、穆王生王子揚、揚生尹、尹生令尹句。	左伝正義
18	荀子非十二子篇楊倞注引世本云、楚平王孫有田公它成。	荀子楊倞注
19	襄廿四年傳…疏云、世本文也。	左伝正義
20	昭廿三年傳疏引世本云、宣公生子夏、夏生御叔、御叔生徵舒。	左伝正義
21	古今姓氏書辯証引世本云、陳烈子生子沮與、後為子沮氏。	古今姓氏書辯証
22	元和姓纂子獻氏引世本云、陳桓公孫子獻之後。	元和姓纂
23	按哀十四年左傳杜注…疏引世本作其夷。	左伝正義
24	元和姓纂子尚、引世本云、陳僖子生麋邱子尚意茲、因氏焉。	元和姓纂
25	元和姓纂子芒氏引世本云、陳僖子生子芒盈、因氏焉。	元和姓纂
26	古今姓氏書辯証引世本云、宋司徒華定後為幹獻氏。	古今姓氏書辯証
27	古今姓氏書辯証引世本云、宋華氏有華季老、其子氏焉。	古今姓氏書辯証
28	成十五年左傳疏引世本云、華督生世子家、家生秀老。	左伝正義
29	桓元年左傳…疏引世本云、華父督、宋戴公之孫好父說之子。	左伝正義
30	後紀云、…又別有不夷氏、云、見世本。	路史後紀
31	元和姓纂引世本云、宋戴公生東鄉克、孫樂喜為司城氏。	元和姓纂
32	禮記檀弓疏引世本云、戴公生樂甫術、術生石甫願繹、繹生夷甫頌、頌生東鄉克、克生西鄉士曹、曹生子罕喜。	禮記正義
33	姓纂有右師氏、引世本云、宋武公生公子中代為右師、因氏焉。	元和姓纂
34	成十五年左傳疏引世本云、莊公生右師戊。	左伝正義
35	文七年左傳…疏引世本云、桓公生公子鱗、鱗生東鄉曜。	左伝正義
36	成十五年左傳…疏引世本云、桓公生向父盼、盼生司城訾守、守生小司寇鱸及合左師。左師即向戊。	左伝正義

## 『潜夫論』志氏姓考辨

37	閔公以下本世本，詩那疏引之，閔作潛。彼云，宋父生正考夫，文有脫減。	毛詩正義
38	隱五年左傳…疏云，僖伯名彊，字子臧。世本云，孝公之子。	左伝正義
39	元和姓纂云…見世本。	元和姓纂
40	禮記檀弓…疏引世本云，桓公生僖叔牙，叔牙生武仲休，休生惠伯彭，彭生皮為叔仲氏。	礼記正義
41	古今姓氏書辯証引世本云，魯叔孫成子生齊季，為子士氏。	古今姓氏書辯証
42	元和姓纂引世本云，季平子支孫為子革氏。	元和姓纂
43	元和姓纂云…引世本云，季桓子生穆叔，其後為子揚氏。	元和姓纂
44	成十四年左傳疏引世本云，孫氏出於衛武公。	左伝正義
45	禮記檀弓…疏引世本云，獻公生成子尚田 <sup>(11)</sup> ，田生文字拔，拔生朱，為公叔氏。	礼記正義
46	禮記檀弓疏引世本云，靈公生昭子郢，郢生文字木，文字生簡子瑕，瑕生衛將軍文氏。	礼記正義
47	古今姓氏書辯証引世本云，世本作郢生文字彌牟，為將軍氏。	古今姓氏書辯証
48	元和姓纂引世本云，衛將軍文字生慎子會，會生強梁，因氏焉。	元和姓纂
49	古今姓氏書辯証卷子氏引世本云，衛文公後卷子，子州氏焉。	古今姓氏書辯証
50	按春秋定十四年…疏引世本云，懿子兼生昭子舉，舉生趙陽。	左伝正義
51	氏族略五史晁氏引世本云，衛史晁之後。	氏族略
52	古今姓氏書辯証引世本云，衛公族充之孫憲，為充憲氏。	古今姓氏書辯証
53	成二年左傳疏引世本云，郤豹生冀丙，丙生缺。	左伝正義
54	昭五年左傳疏云，世本，叔向兄弟有季夙。	左伝正義
55	史記韓世家索隱云，系本 <sup>(12)</sup> 及左傳舊說，皆謂韓萬是曲沃桓叔之子。	史記索隱
56	元和姓纂引世本云，晉韓厥生無忌，無忌生襄，襄生魯為韓言氏。	元和姓纂
57	古今姓氏書辯証云，韓餘，世本，韓宣子子餘之後氏焉。	古今姓氏書辯証
58	氏族略引世本正作餘子。	氏族略
59	禮記樂記疏引世本云，萬生芒，芒生季，季生武仲州，州生莊子絳，絳生獻子茶，茶生簡子取，取生襄子多，多生桓子駒，駒生文侯。	礼記正義
60	元和姓纂引世本云，鄭穆公生大季子孔志父之後。	元和姓纂
61	趙世家索隱引世本云，逝敖生莊子首。	史記索隱
62	…文出世本，見文十二年左傳疏。	左伝正義
63	桓七年左傳疏引世本云，鄧為曼姓。	左伝正義
64	昭十二年穀梁傳…疏云，世本文。	穀梁伝疏
65	按廣韻九麻車字注云，世本有車成氏。	広韻注

表1に示されるように、志氏姓に対応する箋文にみえる『世本』佚文は六十五例もある。これほど頻繁に用いられるのであれば、両者に何らかの関係を想定するのは自然である。しかし、『世本』佚文を箋文とし、さらにその前の文章を丁寧に観察すれば、とある問題に気づくようになる。即ち、『世本』佚文は箋文の一部ではあるが、六十五にも及ぶ用例の中に、『箋校正』が『世本』を引用しているものは一つもない。つまり、『箋校正』は決して『世本』を引用していないのである。

『箋校正』が『世本』に言及している記述をみれば一目瞭然であるが、箋文に引用される五経正義や『元和姓纂』などの記述の中に『世本』佚文が含まれていることは明白である。論理的に言えば、汪継培は『世本』を引用したのではなく、あくまで五経正義をはじめ、『元和姓纂』・『古今姓氏書辯証』などの書物を引用しただけなのである。

具体的な検証を行わない限り、決して志氏姓と『世本』との間に関連性が存在することを否

定してはいけない。後述の如く実は筆者も関連性が存在するかと考えている。しかし、「汪箋に『世本』が多数引かれてある」という不正確な認識を、志氏姓篇が基本的に『世本』に依拠していることの「自明の前提」とするのは、根本的な誤りであると言わざるを得ない。

『世本』原書は南宋の頃に既に散佚しており、汪継培は『世本』そのものをみただけではない。汪継培が生きている時代に、複数の『世本』輯本が作成されたが<sup>(13)</sup>、表1に示されるように、汪継培は全く輯本を利用せず、『世本』佚文が含まれる五経正義をはじめ、『元和姓纂』・『古今姓氏書辨証』などの書物を利用した。これほどまでに『世本』が含まれる記述を使用している以上、汪継培が『世本』に対して何らかの意識を持っていたことは明らかである。客観的に言えば、多くの書物より『世本』佚文を探し出した手法は同時代の輯佚手法と類似し、清代考証学の傾向がそこに反映されていると言えよう。

しかし、『箋校正』が忠実に引用すれば、『世本』を引用すると同然ではないかという意見があるかもしれない。言うまでもなく、それは論理上、全く違うことを意味する。実は「汪箋に『世本』が多数引かれてある」という意見の裏には「佚文＝原書の断片」という認識が存在するか、あるいは原書と佚文との区別をする意識を持っていないと考えられる。かつて、筆者は引用先に保存される佚文は散佚した本書の「使用痕跡」に過ぎないと指摘した<sup>(14)</sup>。その「痕跡」には原書の情報が含まれてはいるが、決して原書そのものの一部ではない。

例えば、表1にもみえる「A生B, B生C…」の連続的な世系はこれまで『世本』世系記載の固有の記述形式と想定されてきたが、実は「A生B」は世系関係を示す最も簡潔な表現であり、古代から中世までのあらゆる文献に散見し、決して『世本』特有のものではないのである<sup>(15)</sup>。筆者が既に指摘したように、それは引用先が必要な世系情報を集約した上で提示する常套的な手法に過ぎない<sup>(16)</sup>。

つまり、志氏姓の比較対象である『世本』佚文のあり方がその引用先の情報提示の都合によって大きく左右されることを前提として、考察方法を工夫しなければならない。対象が複雑で状況がはっきりしないからこそ、「是」・「非」の二択ではなく、あらゆる可能性に留意する必要がある。

## 二、孔子世系をめぐって

前章で『箋校正』にみえる『世本』佚文の本質を明らかにしたことによって、これまで想定されてきた志氏姓が『世本』を参照しているという先入観をプロセスから否定し、あらためて志氏姓と『世本』との関係を検討する必要性を示した。志氏姓の内容は主に世系・氏姓であることから、本章はまず世系記載より考察を進めていく。

あらかじめ断っておくが、筆者は決して両者の間に関連性が存在すること自体を否定したわけではない。そして本章で行う比較検討作業は両者の関係を証明するに足る必要十分条件を満

たしているとは言えない。ただ、はっきりとした結論が出なくても、必要な手順を踏む考察は方法論上不可欠なものであり、新たな発見につながることをここで強調したい。

志氏姓の段階における整理も予測されるので、その原資料の原貌を窺うことはなかなか難しい。一方、『世本』佚文はその引用先の都合によって、転述された情報なので、『世本』本文より短縮・節略されていると考えられる。従って、任意の比較ではなく、まず比較作業に適する「サンプル」を選定しなければならない。志氏姓にみえる世系関係の記述の中で連続性を持つ、即ち複数の世代を連ねるものとして、孔子世系が挙げられる。

孔子に先行する世代について、現存の文献資料の間には矛盾がみられるが、その相互関係は明らかにされていない。本章においては、その矛盾の成因を検討し、志氏姓の孔子世系との関係に迫りたい。

周知の通り、孔子世系に言及する最古の記載は『史記』孔子世家にみえる。即ち、

孔子生魯昌平鄉陬邑。其先宋人也，曰孔防叔。防叔生伯夏，伯夏生叔梁紇。紇與顏氏女野合而生孔子，禱於尼丘得孔子。

とある。ここに示された世系は孔子より上の三世代、即ち防叔までに言及している。また、孔子世家の下文に『左伝』昭公七年孟釐子の遺訓には弗父何・正考父の二代が見える<sup>(17)</sup>。『史記』世家の記述の重心は中心人物自身にあり、その祖先に対してはそれほど興味を持っていない。恐らく司馬遷は孔子世系の原資料を持っていたが、それを全部提示しようとしなかったと考えられる。

ついで今一つの孔子世系が『漢書』古今人表に保存されている。それを整理すると

宋弗父何（愨公子）→宋父（何子）→宋世子士→宋正考父<sup>(18)</sup>→宋大金（考父子）→宋孔父（大金子）→宋方叔（嘉子）→宋伯夏（叔子）→叔梁紇

と、合わせて十世代となっている。表現の違いや字の出入りを別にして、志氏姓の孔子世系と比べれば、「祁父」がみえず、さらに孔父嘉と木金父<sup>(19)</sup>の続柄が逆転している。実のところ、古今人表の系譜関係の記述には一般に錯誤が頻見する<sup>(20)</sup>。孔子世系の世代の欠落や逆転は編纂段階における原資料転写の誤りと考えられる。

『史記』・『漢書』に提示される孔子世系はともに不完全であり、まとまった孔子世系を記す最古の伝世文献は志氏姓である。まずは志氏姓の孔子世系をみてみよう。即ち、

愨公子弗父何生宋父，宋父生世子，世子生正考父，正考父生孔父嘉，孔父嘉生子木金父。



木金父降為士，故曰滅於宋。金父生祁父，祁父生防叔。防叔為華氏所偏，出奔魯，為防大夫，故曰防叔。防叔生伯夏，伯夏生叔梁紇，為鄆大夫，故曰鄆叔紇，生孔子。

とあり、孔子の父親叔梁紇まで合わせて十一世代を示している。『世本』荊津林輯本は『潜夫論』からは取材してはいないが、張澍は志氏姓に基づき、『世本』の孔子世系において「世子」の一代が欠落していることを指摘している<sup>(21)</sup>。これについて、『箋校正』も『毛詩正義』に引用される『世本』の孔子世系の欠落を示している<sup>(22)</sup>。『毛詩正義』商頌に引用される『世本』孔子世系の佚文は即ち、

宋潛公生弗甫何。弗甫何生宋父。宋父生正考甫。正考甫生孔父嘉，為宋司馬。華督殺之，而絕其世。其子木金父降為士。木金父生祁父。祁父生防叔，為華氏所偏奔魯，為防大夫。故曰防叔。防叔生伯夏。伯夏生叔梁紇。叔梁紇生仲尼，則正考甫是孔子七世之祖。

とあり、合わせて十世代となり、志氏姓と比較すると「世子」の一代がみえない。実は『世本』が初めて利用されたことを示す記述は孔子世系に関連する。即ち、『漢書』梅福伝には

至成帝時，梅福復言宜封孔子後以奉湯祀。綏和元年，立二王後，推迹古文，以左氏・穀梁・世本・礼記相明，遂下詔封孔子世為殷紹嘉公。

とあり、張澍をはじめ、一部の学者が綏和元年に『世本』が用いられたのは、まさに孔子世系の一文であると主張している。『漢書』以外の傍証がなく、これ以上の検証は不可能であるが、梅福伝の記述が事実であれば、前漢末においては『世本』の孔子世系は一定の権威を持っていたに違いない。

両方の記述の詳細をみれば、『世本』孔子世系の佚文と志氏姓の孔子世系とは大半の記述を共有していることに気づくだろう。表2が示しているように、両者の間には字の出入や表現の違いはあるが、文章の構造は酷似し、世系記載の間に挿入される説明的コメントも結果的に同じ事件を指すものである。『世本』佚文では孔父嘉が殺害され、孔氏が卿位世襲の地位を失ったことを「絶其世」と表現し、志氏姓では孔父嘉殺害ののち、孔氏が卿位を失い、木金父が「士」に没落したことを「滅於宋」としている。志氏姓の「故曰滅於宋」は明らかに『左伝』昭公七年を踏まえたものであり、『世本』佚文より簡潔にまとめられたという印象を受ける。

ちなみに『左伝』昭公七年「滅於宋」に対する杜預注は「孔子六代祖孔父嘉，為宋督所殺，其子奔魯」と説明している。防叔の魯への出奔を「滅於宋」とするが、防叔は孔父嘉の曾孫なので「其子」は誤りとなる。杜預注のこの一文について、『後漢書』孔融伝注には同じ内容を

服虔の言説として引用している<sup>(23)</sup>が、『史記集解』はそのまま杜預注として引用している。『左伝』杜預注は服虔の言説を踏襲していると思われるが、かなり早い段階で服虔旧注の「所殺」と「其子」との間には脱文があったのかもしれない。

表2 『世本』佚文の孔子系譜と志氏姓孔子系譜の比較

『毛詩正義』商頌引『世本』	志氏姓
宋潛公生弗甫何。弗甫何生宋父。宋父生正考甫。正考甫生孔父嘉。為宋司馬。華督殺之。而絕其世。其子木金父降為士。木金父生祁父。祁父生防叔。為華氏所偏奔魯。為防大夫。故曰防叔。防叔生伯夏。伯夏生叔梁紇。	閔公子弗父何生宋父。宋父生世子。世子生正考父。正考父生孔父嘉。孔父嘉生子木金父。木金父降為士。故曰滅於宋。金父生祁父。祁父生防叔。防叔為華氏所偏。出奔魯。為防大夫。故曰防叔。防叔生伯夏。伯夏生叔梁紇。

『世本』佚文と志氏姓との類似性に鑑みれば、志氏姓が『世本』を参照しているとは断言できないが、同じ系譜原資料を有していることは確実である。では、『世本』の孔子世系はいつから「世子」が欠落したのか。そもそも『世本』の孔子世系は『毛詩正義』に保存されたものであり、引用された段階で欠落が発生したことも考えられる。欠落が生じた時期を特定することは困難ではあるが、いつ気付かれたかある程度限定することは可能である。その手がかりは『左伝正義』にある。

『左伝』昭公七年「正考父」に対する杜預注は「弗父何之曾孫」である。つまり、杜預注が参照している孔子系譜の世代数は志氏姓・本姓解と一致している。同じく昭公七年の孔子関係の伝文に対して、『左伝正義』は『孔子家語』<sup>(24)</sup>本姓篇の孔子世系を引用して、

家語本姓篇云、宋湣公熙生弗父何、何生宋父周、周生世子勝、勝生正考父、考父生孔父嘉、其後以孔為氏也。孔父生木金父、金父生臯夷父、夷父生防叔。防叔辟華氏之偏、而奔魯生伯夏、伯夏即生梁紇、梁紇即生孔子。

とする。現行の『家語』には本姓解があり、

宋公生丁公申、申公生緡公共及襄公熙。熙生弗父何及厲公方祀。方祀以下、世為宋卿。弗父何生宋父周。周生世子勝。勝生正考甫。考甫生孔父嘉。五世親盡、別為公族。故後以孔為氏焉。一曰孔父者、生時所賜號也、是以子孫遂以氏族。孔父生子木金父。金父生臯夷。臯夷生防叔、避華氏之禍而奔魯。防叔生伯夏。夏生叔梁紇。

とする。両者を比較すれば、『左伝正義』昭公七年は『家語』を忠実に引用しておらず、本姓解の文章を節略したものと思われる。まず、本姓解は弗父何・厲公の父である「熙」を「襄公」とし、すなわち『史記』宋世家の「煬公熙」としている<sup>(25)</sup>。『史記索隱』も「襄公」と記す『家

語』の文を引用している<sup>(26)</sup>。一方で『左伝正義』昭公七年に引用される『家語』本姓篇は「宋  
 泯公熙」と、「熙」はそのままで「襄公」を「泯公」に改めている。阮元の『重刊宋本十三經  
 注疏附校勘記』の「春秋左伝注疏校勘記」は今本の『家語』が「襄公」に作ることを「大誤」  
 と指摘している。

また、同じ校勘記には「浦鏜正誤臯作睪」がみえる。浦鏜は清代の学者であり、「正誤」は『十三  
 經注疏正字』を指すと考えられる<sup>(27)</sup>。厳密に言えば、「臯」は「睪」の誤ではなく、『左伝正義』  
 の他、『孝經注疏』にも「睪夷」を「臯夷父」に作る。唐代顔元孫<sup>(28)</sup>『干祿字書』の平声部に  
 は「臯」・「臯」・「臯」がみえ、「臯」は俗字、「臯」は通字、「臯」は正字であると説明して  
 いる。唐代においては、「臯」と「臯」とをはっきり区別せず、通用することが普通であった  
 と考えられ、抄本の書き手の習慣によるものであろう。

注目すべきは、なぜここにおいて、『左伝正義』が『世本』ではなく、わざわざ本姓解を修  
 正した上で引用しているのかということである。そもそも『左伝正義』が積極的に『世本』を  
 用いるのは杜預注が『世本』を引用することに影響されたからである。杜預注は孔子世系につ  
 いて、『世本』との世代数の違いに言及せず、したがって杜預がみた『世本』の孔子世系には  
 既に世代が欠落していると判断することには積極的な証拠がない。

五經正義は初唐の孔穎達の段階で創作されたものであるだけでなく、それ以前の注疏を流用・  
 編綴したものである。ちなみに『毛詩正義』と『左伝正義』は同じく隋の劉炫の義疏を藍本に  
 している<sup>(29)</sup>。劉炫は南北朝時代の義疏学の「異説を好む」傾向と違って、先行する注疏に対  
 して、非常に攻撃的な態度をとっている。『左伝正義』に劉炫の杜預注に対する批判が百五十  
 箇所も残っているのは何よりの証拠である。もし劉炫が『世本』と杜預注との孔子世系の世代  
 数の矛盾に気付いたなら、必ずや杜預注を批判したであろう<sup>(30)</sup>。さらに『左伝』昭公七年杜預  
 注の「滅於宋」に関する誤りについても、劉炫の批判は見当たらない。服虔の旧注も同じ内容  
 を記しているから、劉炫は問題視しなかったのかもしれない。

『毛詩正義』に引く『世本』孔子系譜は、劉炫の義疏ではなく、唐代の編纂作業の段階で発  
 生したものと考えられる。さらに言うと、『毛詩正義』が『世本』の孔子系譜を引用した上で、  
 正考甫を孔子七世の祖と説明したのは決して間違っていない。故に正考甫より前の世代が欠落  
 していても、一応『毛詩正義』の中では矛盾はみられない。

やや腑に落ちないかもしれないが、喬秀岩が指摘したように、義疏学は実事求是の学問では  
 ない<sup>(31)</sup>。訓詁は經（伝）文を理解するために作られたものであり、客観的事実を追及するも  
 のではない。さらにいうと、注疏の「合理性」はあくまでも訓詁家自身の中に存在するもので  
 あり、必ずしも現在の研究者が求める一貫した客観性を持つとは限らない。現代の論理的思考  
 ではなく、当時の学術状況に合わせて、柔軟に考証することが要求される。

『左伝正義』の編纂に当たって、『世本』の孔子系譜の世代数が杜預注と矛盾することに気づ

き、欠落のある『世本』の孔子系譜を退け、杜預注と矛盾しない『家語』孔子世系の「襄公熙」を「泯公熙」に改め、採用したのは、孔穎達を代表とする初唐の経学者が「疏は注を破らず」という立場を厳守していることにほかならない。『毛詩正義』・『左伝正義』にみえる孔子系譜への態度の背後には初唐の経学の傾向が看取される。つまるところ、『左伝』杜預注が成立した後、『世本』の孔子系譜は欠落してしまい、五経正義の編纂段階でその欠落が確認されたものと考えられる。

志氏姓をはじめ、複数の文献に保存される孔子世系を分析し、『世本』佚文の孔子世系の欠落などを詳細に考証した上で、志氏姓の孔子世系は『世本』との直接的な引用関係があるとは断言できないものの、少なくとも両者が同じ原資料を共有しているとは考えられる。

考察した結果、一見すると「当たり前」のことを再確認しただけのようであるが、それは先入観を捨て、分析作業の限界を明白にした上で、正しい研究手順を踏んでから出した結論であり、従前のものとは一線を画していよう。次章においては、引き続き志氏姓の氏姓記載を検討してみる。

### 三. 氏姓情報の比較

志氏姓には『世本』と極めて近似した世系記載が存在するが、志氏姓自体の主な内容は世系ではなく、氏姓である。一方、『世本』の佚文は氏姓関係のものが最も多いが、記述は短く、特定の形式が確認できない。志氏姓の氏姓の記載も原資料を厳密に引用せずに、情報を集約した上で提示しているという印象を受ける。そのため、志氏姓と『世本』佚文の比較は記述形式ではなく、情報がどこまで共有されているか、さらにその中で相反する内容が存在するかを中心として進めねばならない。

まずは志氏姓の氏姓記載を『世本』の氏姓関係の佚文と比較してみよう。

表3 『潜夫論』志氏姓と『世本』佚文の比較<sup>(32)</sup>

志氏姓	『世本』佚文
1. 州・薄・甘・戲・露・怡、及齊之國氏、高氏、襄氏、隰氏、士強氏、東郭氏、雍門氏、子雅氏、子尾氏、子襄氏、子淵氏、子乾氏、公旗氏、翰公氏、賀氏、盧氏、皆姜姓也。	州國、姜姓（左桓五年正義）。 國氏、懿伯生貞孟、貞孟生成伯高父（禮檀弓正義）。 高氏、敬仲生莊子、莊子生傾子、傾子生宣子、宣子生厚、厚生止（左襄二十九年正義）。 子襄氏、齊桓公公子子襄之後（姓氏書辨證二十二）。 雍門氏、齊頃公生子夏勝、以所居為雍門氏（姓氏書辨證二十九）。 子乾氏、齊公子都字子乾之後（氏族略三）。 公旗氏、齊威王時有左執法公旗藩（姓氏書辨證二）。 子泉氏 <sup>(33)</sup> 、齊頃公生子泉湫、因氏焉（姓氏書辨證二十二）
2. 王季之妃大任、及謝、章、昌 <sup>(34)</sup> 、采、祝、結 <sup>(35)</sup> 、泉、卑 <sup>(36)</sup> 、遇、狂大氏、皆任姓也。	任姓、謝章薛舒呂祝終泉畢過（左隱十一年正義）。

李 弘喆

<p>3. 公族有楚季氏，列宗氏，門強氏，良臣氏，耆氏，門氏，侯氏，季融氏，仲熊氏，子季氏，陽氏，無鉤氏，焉氏，善氏，陽氏，昭氏，景氏，嚴氏，嬰齊氏，來氏，來纘氏，即氏，申氏，訥氏，沈氏，賀氏，咸氏，吉白氏，伍氏，沈灑氏，餘推氏，公建氏，子南氏，子庚氏，子午氏，子西氏，王孫<sup>(37)</sup>，田公氏，舒堅氏，魯陽氏，黑肱氏，皆半姓也</p>	<p>楚季氏。楚若敖氏生楚季。因氏焉。陳大夫有楚季融（姓纂八語。氏族略四）。          鬬彊氏。半姓。若敖生鬬彊。因氏焉（氏族略五）。          鬬門氏。陳鬬父之後。楚大夫有鬬門陽（姓纂五十條）。          季融氏。楚鬬廉生季融。子孫氏焉（姓纂六至）。          子季氏。楚公族子季氏（姓氏書辨證二十二）。          子午氏。楚公子午之後（姓纂六止。姓氏書辨證引同）。          陽氏。穆王生王子揚。揚生尹。尹生令尹句（左昭十七年正義）。          焉氏。艾獵。叔敖之兄（左宣十一年正義）。          沈氏。楚縣公葉公子高（禮縮衣正義）。</p>
<p>4. 恭叔氏，邯鄲氏，訾辱氏，嬰齊氏，樓季氏，盧氏，原氏，皆趙嬴姓也。…鍾離。運掩，菟裘，尋梁，修魚，白真，飛廉，密如，東灌，良，時，白，巴，公巴公巴<sup>(38)</sup>，剡，復，蒲，皆嬴姓也。</p>	<p>鍾離。嬴姓（水經淮水注）。</p>
<p>5. 陳袁氏，咸氏，魯氏，慶氏，夏氏，宗氏，來氏，儀氏，司徒氏，司城氏，皆媯姓也。</p>	<p>鍼氏。鍼宜咎。陳鍼子八世孫（左襄二十四年正義）。          夏氏。宣公生子夏。夏生御叔。叔生微舒。舒生惠子晉。晉生御寇。寇生悼子嚳（左昭二十三年正義）。          司城氏。宋戴公生東鄉克。孫樂喜為司城氏。陳哀公子邾勝之後。亦為司城氏（姓纂七之）。</p>
<p>6. 宋孔氏，祝其氏，韓獻氏，季老男氏，巨辰，絰氏，事父氏，皇甫氏，華氏，魚氏，而董氏，艾，歲氏，鳩夷氏，中野氏，越椒氏，完氏，懷氏，不第氏，冀氏，牛氏，司城氏，岡氏，近氏，止氏，朝氏，敦氏，右歸<sup>(39)</sup>氏，三伋氏，王夫氏，宜氏，徵氏，鄭氏，目夷氏，鱗氏，臧氏，虺氏，沙氏，黑氏，圉龜氏，既氏，據氏，磚氏，己氏，成氏，邊氏，戎氏，買氏，尾氏，桓氏，戴氏，向氏，司馬氏，皆子姓也。</p>	<p>祝其氏。宋戴公子祝其為司寇。因氏焉。見世本（元和姓纂引風俗通）          華氏。宋督是戴公之孫。好父說之子。華父是督之字（左隱八年正義）。          季老氏。宋華氏有華季老。子孫氏焉（氏族略四。姓氏書辨證二十九）。          司城氏。宋戴公生東鄉克。孫樂喜為司城氏。陳哀公子邾勝之後。亦為司城氏（姓纂七之）。          右師氏。宋莊公公子申世為右師氏（氏族略四）。          鱗氏。桓公生公子鱗。鱗生東鄉嚳。嚳生司徒文。文生大司寇子奏。奏生小司寇朱（左成十五年正義）。          向氏。桓公生向父昉。昉生司城警守。守生小司寇鱣及合左師（左成十五年正義）。</p>
<p>7. 有螭氏，后氏，眾氏，臧氏，施氏，孟氏，仲孫氏，服氏，公山氏，南宮氏，叔孫氏，叔仲氏，子我氏，子士氏，季氏，公鉏氏，公巫氏，公之氏，子干氏<sup>(40)</sup>，華氏，子言氏，子駒氏，子雅氏，子陽氏，東門氏，公析氏，公石氏，叔氏，子家氏，榮氏，展氏，乙氏，皆魯姬姓也。</p>	<p>厚氏。孝公生惠伯革。其後為厚氏（禮檀弓正義）。          臧氏。僖伯名彊。字子臧。孝公之子。左隱五年正義。孝公生僖伯彊。彊生哀伯達。達生伯氏瓶。瓶生文仲辰（左莊二十八年正義。禮禮器正義）。          南宮氏。孟僖子孫閔。號南宮敬叔。叔生路。路生會。會生虔。為南宮氏（姓纂二十二覃）。          桓公生僖叔牙。叔牙生武仲休。休生惠伯彭。彭生皮。為叔仲氏（禮檀弓正義）。          子士氏。魯叔孫成子生齊季為子士氏（姓氏書辨證二十二）。          子革氏。宋司城子革之後。又曰季平子支孫為子革氏（姓纂六至。氏族略三）。          子揚氏。季桓子生穆叔。其後為子揚氏（姓纂六至。氏族略三）。          仲氏。仲遂。魯莊公之子。東門襄仲（禮檀弓正義）。          子叔氏。叔肸生聲伯嬰齊。齊生叔老。老生叔弓（禮檀弓正義）。</p>
<p>8. 衛之公族，石氏，世叔氏，孫氏，甯氏，子齊氏，司徒氏，公文氏，析龜氏，公叔氏，公南氏，公上氏，公孟氏，將軍氏，子強氏，強梁氏，卷氏，會氏雅氏，孔氏，趙陽氏，田章氏，孤氏，王孫氏，史龜氏，羌<sup>(41)</sup>氏，羌憲氏，邊氏，皆衛姬姓也。</p>	<p>孫氏。孫氏出於衛武公。至林父八世（左成十四年正義）。          公叔氏。獻公生成子當。當生文子拔。拔生朱（禮檀弓正義。論語疏）。          公孟氏。靈公之子。字公孟。名彊（左隱八年正義）。          將軍文氏。文子生簡子瑕。瑕生衛將軍文氏（禮檀弓正義）。          卷子氏。衛文公後卷子子州氏焉（姓氏書辨證二十五）。          趙氏。趙懿子兼生昭子舉。舉生趙陽（左定十四年正義）。          羌師氏。衛公族有羌師氏（姓氏書辨證十四）。          羌憲氏。衛公族羌之孫憲為羌憲氏（姓氏書辨證十四）。</p>

『潜夫論』志氏姓考辨

<p>9. 郤氏之班, 有州氏, 祁氏。…凡郤氏之班, 有冀氏, 呂氏, 苦成氏, 溫氏, 伯氏。靖侯之孫欒賈, 及富氏, 游氏, 賈氏, 狐氏, 羊舌氏, 季夙氏, 籍氏, 及襄公之孫孫廙, 皆晉姬姓也。</p>	<p>郤氏。郤豹生冀芮。芮生缺。缺生克(左成十一年正義)。豹生義。義生揚。揚生州(全上)。                  欒氏。欒叔賈父(晉世家正義)。                  大狐氏。晉大夫大狐伯生突生饒為大狐氏。其後大狐為晉大夫。氏族略四。姓氏書辨證三十一)。                  羊舌氏。叔向兄弟有季夙(左昭五年正義)。                  季夙氏。晉靖侯孫季夙之後(氏族略四)。                  籍氏。廙生司空頡。頡生南里叔子。子生叔正官伯。伯生司徒公。公生曲沃正少襄。襄生司功大伯。伯生侯季子。子生籍游。游生談。談生秦(左昭十五年正義)。</p>
<p>10. 凡桓叔之後, 有韓氏, 言氏, 嬰氏, 禰餘氏, 公族氏, 張氏, 此皆韓後姬姓也。</p>	<p>韓氏。韓萬。曲沃桓叔之子。史韓世家索隱。韓萬。莊伯弟(左桓二年正義)。                  韓言氏。晉韓厥生無忌。無忌生襄。襄生魯。為韓言氏(姓纂二十五寒。氏族略四)。                  季嬰氏。晉樓委嬰之後(姓纂六至。氏族略四)。</p>
<p>11. 魏氏, 令狐氏, 不雨氏, 葉大夫氏, 伯夏氏, 魏強氏, 豫氏, 皆畢氏, 本姬姓也。</p>	<p>魏氏。畢萬生芒季。芒季生武仲州(左閔元年正義)。</p>
<p>12. 鄭恭叔之後, 為公文氏。軒氏, 駟氏, 豐氏, 游氏, 國氏, 然氏, 孔氏, 羽氏, 良氏, 大季氏。十族之祖, 穆公之子也, 各以字為姓。及伯有氏, 馬師氏, 楮師氏, 皆鄭姬姓也。</p>	<p>子罕氏。鄭穆公子喜。字子罕。生子展舍之。舍之生子皮虎。或作子軒氏(姓氏書辨證二十二)。                  子駟氏。子游子瑕。並公孫夏之子(左昭十九年正義)。                  子游氏。鄭穆公生子假字子游之後(姓氏書辨證二十二)。                  子國氏。鄭穆公生子國發。發生子產僑簡成子。僑生子思參。參生子玉珍武子。珍生子樂卑顯莊子。為子國氏(姓氏書辨證二十二)。                  子然氏。鄭穆公子子然之後(姓氏書辨證二十二)。                  子孔氏。鄭穆公生子嘉字子孔之後(姓氏書辨證二十二)。                  去疾氏。鄭穆公子去疾之後。去疾字子良。又有良氏。所以別族(氏族略四。姓氏書辨證三十)。                  大季氏。鄭穆公生子大季子孔志父之後(姓纂十四泰)。                  馬師氏。鄭穆公有馬師之官。馬師頡。馬師朔。馬師黶(姓纂三十五馬)。</p>
<p>13. 偃姓舒庸, 舒鳩, 舒龍, 舒共<sup>(42)</sup>, 止龍, 鄆, 淫, 參, 會, 六, 院, 葉, 高國。慶姓樊, 尹, 駱。曼姓鄧, 優。歸姓胡, 有, 何。葢姓滑, 齊。掎姓棲, 疏。御姓署, 番, 湯。嵬姓饒, 攘, 剌。隗姓赤狄, 姬<sup>(43)</sup>姓白狄, 此皆大吉之姓。</p>	<p>偃姓。舒庸。舒蓼。舒鳩。舒龍。舒鮑。舒龔(左文十二年正義)。                  曼姓。鄧為曼姓(左桓七年正義)。                  歸姓。胡。歸姓(史老莊列傳索隱)。                  鮮虞。姬姓。白狄也(穀梁昭十二年疏)。</p>

表3に示されるように、志氏姓の氏姓情報が集中する記述は合計十三条ある。その内容は春秋時代のものであり、主に『左伝』の記述範囲内にとどまっているという印象を受ける。

まずは1をみてみよう。1は姜姓の小国及び斉の世族を列挙しているものである。姜姓に対しては、現存の『世本』佚文には『左伝正義』桓五年の「州国は姜姓」の一条しか確認できない。一方、1にみえる斉の國氏・高氏・雍門氏・子襄氏・子淵氏・子乾氏・公旗氏に関連する『世本』佚文は五経正義をはじめ、『姓氏書辨證』・『氏族略』より確認される。

前章で述べたように、『世本』佚文のあり方は引用先の目的によって変化される。故に上記の『世本』佚文が姜姓との関係を示してはいないが、少なくとも『世本』にはかかる斉の世族の情報があつたに違いない。そして、『世本』佚文に示される情報は志氏姓のものと相反することがない。言うまでもなく、この程度の比較で両者の直接的引用関係を断定することはでき

ないが、前章の考察と同様に関連性の検証の一環としては重要な意味がある。

そして、任姓を語る2をみてみよう。『左伝正義』隠十一年に用いられる『世本』佚文と比較すれば、字の異同が少なからず認められ、『世本』佚文にみえない内容もあるが、両者の間には矛盾はない。

ちなみに、2の「昌」・「結」・「卑」について、『箋校正』はそれぞれを「呂」・「終」・「畢」にあらためたが、その根拠はこの『左伝正義』隠十一年に用いられる『世本』佚文である。無論、『箋校正』の見解は志氏姓が『世本』を参照していることを前提とするものであり、『左伝正義』にみえる『世本』佚文の史料学的問題などを配慮しているわけではない。但し、「昌」と「呂」・「結」と「結」・「卑」と「畢」それぞれの字形はかなり類似しており、詳細な経緯を検証することができないが、流伝している間に生じた誤写と考えて差し支えなからう。

もう一つの例として、12を挙げる。12は軒氏・駟氏・豊氏・游氏・國氏・然氏・孔氏・羽氏・良氏・大季氏を列挙し、鄭の「十族の祖、穆公の子」と示している。その十祖に対して、『世本』佚文より八つも確認され、かつ穆公との父子関係にも言及されている。繰り返しになるが、12も1・2の比較と同様に、『世本』佚文と多くの共通点を共有しながら、矛盾はない。

紙幅の制限もあり、その他の事例の説明を省略するが、表3に示される志氏姓の氏姓記載十三条のいずれに対しても、部分的に共通の対象を扱う『世本』佚文が確認される。つまりと、志氏姓と『世本』の間には共通の対象が多く存在し、相反する情報が確認されていない。両者の間には明確な引用関係が存在すると断言するまでは証拠不十分ではあるが、関連性が存在することを否定できる証拠は全く見当たらない。従って、志氏姓の氏姓記載にはその世系記載と同様に、『世本』と同源的な内容が存在すると考えられる。

#### 四. 後漢時代における世系記載の使用状況

以上の二章にわたって、志氏姓と『世本』との相互関係を検証してきた。両者の間には関連性が存在することを示唆する多くの証拠を提示してきたにもかかわらず、筆者が「同源的」という言葉にこだわるのには理由がある。

木版印刷が普及する以前である後漢時代において、書物はまだ量産できず、主に人間関係を通じて、抄写の方式で流通していたと考えられる。そのため、共通の話題を持つ、多様な写本が存在していたに違いない。後漢時代において、全ての世系記載が『世本』に集約されることはあり得ない。もちろん、流通していた世系関係の文献は決して『世本』だけではなく、さらにいえば、『世本』自体にも多くの異本があったといえよう。故に筆者は文献の間の引用関係に対して、比較的慎重な態度を取っている。

志氏姓の原資料と考えられる「世記」の実態に迫るために、後漢時代における世系記載に対する使用傾向を検討する必要がある。世系記載そのものの起源について、吉本道雅は王侯・世

族の系譜は本来的にはそれぞれの家系において祭祀の必要上保存されていたものとし、『世本』のような資料」が編纂される一つの契機が春秋学の発生にあったことは容易に推測されると提示した<sup>(44)</sup>。何故『世本』のような資料」と表現されているかという点、『世本』が芸文志に収録され、言わば系譜・世系資料の代表であると古くから現在に至るまで認識されているからである。

既に散佚した『左伝』賈逵・服虔旧注の佚文から多くの世系情報が示されるが、残念ながら、出典には言及されていないので、結局何によるかは判断できない。ところで後漢時代において、『世本』は世系であると明言した上で利用した学者がいた。即ち、鄭玄である。

鄭玄（127年～200年）<sup>(45)</sup>は今・古文経学を兼ねて学び、漢代経学を集大成した。後漢末の乱世において、鄭玄は華北の数々の軍閥集団の間を顛沛流離したが、そうした背景のもとで彼が目指した真理は「秩序」、すなわち「礼」であった<sup>(46)</sup>。

鄭玄は馬融<sup>(47)</sup>の弟子であり、当然その学問も馬融の影響を受けたと考えられる。『經典釈文』<sup>(48)</sup>湯誓には

馬云、俗儒以湯為諡、或為號。號者、似非其意。言諡近之、然不在諡法、故無聞焉。及禹、俗儒以為名。帝系禹名文命、王侯世本湯名天乙、推此言之、禹豈復非諡乎、亦不在諡法、故疑焉。

があり、馬融の言説は『王侯世本』に言及しているようにみえる。それが事実であれば、『世本』を明示した上での最初の用例になる。ここにおいては、『釈文』が馬融の『尚書』注を引用していることが推測できるが、どこまでが馬融の言説なのか、傍証はない。「號者」より以降は馬融の言った「為諡、或為號」に対する陸徳明のさらなる説明とも考えられる。馬融より以降、訓詁学が定着し、『世本』が本格的に訓詁材料として使用されはじめたと考えられる。

表4 鄭玄の言説にみえる『世本』一覽

引用・言及例	記述分類	出處
鄭司農云、諷誦詩、主誦詩以刺君過。故國語曰、瞽賦矇誦、謂詩也。杜子春云、帝讀為定、其字為奠。書亦或為奠。世奠繫、謂帝繫・諸侯卿大夫世本之屬是也。小史主次序先王之世、昭穆之繫、述其德行。瞽矇主誦詩、并誦世繫、以戒勸人君也。故國語曰、教之世、而為之昭明德而廢幽昏焉、以休懼其動。玄謂諷誦詩、主謂厥作柷謚時也。諷誦王治功之詩、以為諡。世之而定其繫、謂書於世本也。雖不歌、猶鼓琴瑟、以播其音、美之。		『周礼』瞽矇
奠者、殺牲以血之、神之也。鄭司農云、祭祀先卜者、卜其日與其牲。玄謂先卜、始用卜筮者、言祭言祀、尊焉天地之也。世本作曰、巫咸作筮。卜未聞其人。	作	『周礼』龜人
鄭司農云、志謂記也。春秋傳所謂周志、國語所謂、鄭書之屬是也。史官主書、故韓宣子聘于魯、觀書大史氏。繫世、謂帝繫・世本之屬是也。…		『周礼』小史
馬社、始乘馬者。世本作曰、相上作乘馬。鄭司農云、臧僕、謂簡練馭者、令皆善也。玄謂僕、馭五路之僕。	作	『周礼』校人
和離、謂次序其聲縣也。笙簧、笙中之簧也。世本作曰、垂作鐘。無句作磬。女媧作笙簧。	作	『礼記』明堂位



さて、鄭玄の言説にみえる『世本』の使用例は『周礼』・『礼記』の鄭玄注に確認される。

表4に示されるように、『周礼』鄭玄注は『世本』を世系であると解釈するが、鄭玄の言説には『世本』の世系記載は見当たらない。実のところ『礼記』鄭玄注には登場人物の世代関係などの説明が頻見し、その大半は『世本』と矛盾しないが、出典には言及していない。後の『礼記正義』は鄭玄注の世系関係の説明が『世本』を参照したものと認識しているが、それは『礼記正義』が成立する時点での理解に過ぎない<sup>(49)</sup>。

一方、鄭玄の言説に引用されている『世本』の記述は全て「作」関係のものであり、「世本作」と表示されている。当然、注釈の方向は『周礼』などの礼学関係の書物の本文の内容に制約されることが一つの重要な原因と考えられるが、実は鄭玄の言説にとどまらず、後漢時代における『世本』受容の全体にもこの傾向が見受けられる。

筆者は李弘喆2018において、王充<sup>(50)</sup>をはじめ、応劭<sup>(51)</sup>・高誘<sup>(52)</sup>など、後漢時代初期より漢魏交替期に至るまでの『世本』を明示した上での用例を検討した。上述の鄭玄の言説にみえる『世本』の用例と同様に、もっぱら「作」に集中し、世系記載の用例は確認されない<sup>(53)</sup>。鄭玄の説明がある以上、当時の『世本』には世系関係の記述が疑う余地なく存在したと考えられる。では、何故後漢時代に世系資料を明示した上で使用する用例が出て来ないのか。

今日の我々は無意識に芸文志が描いた枠組みで古代の書籍の状況を想像してしまう傾向がある。実際には芸文志に収録される書物は前漢皇室の蔵書のみである。先述の如く、後漢時代において、先述の如く、後漢時代において、書物は主に抄写の方式で流通していたと考えられる。そのため、共通の話題を持つ、多様な写本が存在していたに違いない。世系資料が包括的に特定の書物に集約されたことは考え難い。鄭玄にとって、世系情報を獲得できるものは『世本』以外にもある、言い換えれば鄭玄の言説にみえる世系関係の内容は『世本』特有のものではないと推測できる。しかし、多様な世系関係の資料があったとしても、それぞれ個性を持つ書物ではなく、一括りで認識されていたと考えられる。鄭玄の言った「帝繫」・「世本」は特定の書物のタイトルではなく、「帝繫」・「世本」の類のものを指しているのではないかと推測する。

一方、鄭玄注にみえる「世本作」の「世本」は「作」の篇が入っている『世本』を指すと考えられる。なぜ後漢時代において、『世本』の「作」関係の記載のみが用いられたかという点、他の書物には零細な「作」関係の記述がみえるが、『世本』を上回るものがなかったためである。つまるところ、「作」は『世本』の特徴的な内容であると認識され、後漢時代に『世本』を利用した人たちは「作」関係の記述を使うために『世本』を用いたと言っても過言ではない。また、『世本』にみえる上古の聖人・聖王制作の記述は緯書との一定の共通点を持つと考えられ、鄭玄・応劭が専ら「作」関係の記載を使用したことから後漢時代における讖緯思想の動きも看取される<sup>(54)</sup>。

第二・三章で獲得した志氏姓と『世本』の関連性を示す証拠を踏まえた上で、後漢時代の学

術史背景とあわせて考えてみよう。『世本』が劉歆<sup>(55)</sup>の『七略』を藍本とした芸文志に収録されることによって、その存在が次第に世間に知らされる。後漢時代における讖緯思想の動きに関連し、『世本』の上古の聖人・聖王制作の記述が注目されるようになった<sup>(56)</sup>。志氏姓の内容が上古の伏羲・炎黄帝にまで遡っているので、王符は『世本』を参照した可能性が十分に考えられる。しかし、両者の比較分析は『世本』佚文のあり方に制限されており、引用関係を断定することはできない。志氏姓に『世本』佚文以外の内容がある以上、当然『世本』以外の世系記載を参照したこともあり得る。

つまるところ、後漢時代において、世系記載は特定の書物として明示した上で引用する習慣は定着せず、王符は鄭玄と同様に、特定の書物ではなく、世系記載の汎称として「世記」という表現をしたと考えた方が妥当であろう。「世記」は『世本』を含むが、『世本』に限定されないとと言っても差し支えなかろうが、本稿は志氏姓が参考した「世記」は世系記載の汎称であり、その中に『世本』と同じ原資料を有するもの、即ち「同源的資料」が含まれるという結論をつけておきたい。

## 終わりに

本稿は志氏姓と『世本』との関係の「前提」とされるものを検証した上で、あらためて両者の間に存在する関係を明らかにし、後漢時代における世系記載の利用状況にあわせ、志氏姓の原資料とされる「世記」の実態を考察した。

まず志氏姓の『箋校正』にみえる『世本』佚文を蒐集し、そのあり方・役割を分析した上で、これまで志氏姓と『世本』との関係の「自明の前提」とされる認識は根本的な誤りであることを指摘した。そして、志氏姓の孔子世系と『世本』佚文・『家語』本姓解の孔子世系との関連性を検討し、『世本』佚文の孔子世系の欠落の詳細を語った上で、志氏姓には『世本』と同源の原資料が存在する可能性を示した。さらに志氏姓が参照している「世記」と『世本』との関係を検証するために、両者の氏姓関係の記載を比較した結果、多数の情報が共有されており、相反する内容が存在しないことを指摘した。最後に、以上の検証結果を踏まえて、後漢時代における世系記載の利用状況にあわせて、志氏姓が参照している「世記」は特定の書物ではなく、広義の世系資料一般の汎称であるという結論に達した。

志氏姓の『箋校正』には『世本』佚文が六十五条も含まれてはいるが、全ては他の引用先に由来することが明らかである。『箋校正』は決して『世本』及びその輯本を引用していない。従って、これまで想定されてきた志氏姓が『世本』を参照しているという見解を生み出した思考のプロセス自体は成立し得ないことは明らかである。

志氏姓の世系記載・氏姓記載と現存の『世本』佚文との比較を行い、関連性が存在する可能性を示唆する積極的な証拠を獲得した。しかし、比較対象である『世本』佚文の文献学的性格

に制限され、明確な引用関係と判断するまでは証拠不十分であると認めざるを得ない。最終的に志氏姓が参考した「世記」には『世本』と同源の資料が含まれるという「曖昧」な結論に対して、そもそもこの一連の考察が本当に必要なのかという疑問を持つ読者も少なからずいるだろう。誤った前提に基づく以上、仮にその結果は間違っていないとしても、間違い以外のなものでもない。認識の土台を作り直し、正しい研究手順で基礎研究の最初の一步を踏み出すことは重要であり、強引に結論をつけることをせず、柔軟に可能性を残すべきであると筆者はそう考えている。本稿を通じて関連資料への理解を深め、多くの事実初めて気づくことは、作業自体の必要性を示していると言えよう。『潜夫論』を対象とする文献学的研究は決して十分ではなく、その包括的研究を一つの長期的課題としたい。

## 文献

### 日本語

- 池田秀三 1979 「『潜夫論』版本小考一特に元大徳本について」『中国思想史研究』3。  
金子修一 2009 「則天武后と杜嗣先墓誌—栗田真人の遣唐使と関連して—」『国史学』197号。  
喬秀岩 2001 『義疏学衰亡史論』白峰社。  
高橋継男 2005 「最古の「日本」—「杜嗣先墓誌」の紹介」専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本—新発見「井真成墓誌」から何がわかるか』朝日新聞社。  
田中麻紗巳 1986 『両漢思想の研究』研文出版。  
日原利国 1986 「王符の法思想」『東洋の文化と社会』6。  
野間文史 1998 『五経正義の研究』研文出版。  
湯浅幸孫 1979 「『潜夫論』に引く魯詩について」『中国思想史研究』3。  
吉本道雅 2007 「『左伝』と西周史」『中国古代史論叢』第5集。  
吉本道雅 2018 「『漢書』古今人表と春秋史」『京都大学文学部研究紀要』57。  
李弘喆 2018 「世本探源—『世本』受容史研究序説—」『史林』101巻5号。  
李弘喆 2019 「世本錐指—『世本』宋忠注をめぐる—」『東洋史研究』78巻3号。  
李弘喆 2020 「世本志疑—「三礼」における『世本』受容をめぐる—」『史林』103巻5号。  
李弘喆 2021 「世本釈難—「易」・「詩」・「書」正義にみえる『世本』世系記載の一考察—」『東洋学報』第103巻第1号。

### 中国語

- 蔣沢楓 2014 「論王符『潜夫論』的成書時間」『古籍整理研究学刊』1。  
李慧玲 2008 「阮刻『毛詩注疏（附校勘記）』研究」華東師範大学博士学位論文。  
李曉敏 2014 「『潜夫論』佚文及明前版本情況」『河南科技大学学報（社会科学版）』32-1。  
張覺 1998 「王符『潜夫論』考」『古籍整理研究学刊』4・5合刊。

本稿は杉山財団特別研究助成金の助成を受けたものです。

京都大学文学研究科非常勤講師・大手前大学史学研究所共同研究者

注

- (1) 『後漢書』王充王符仲長統列伝参照。
- (2) 日本においては、武内義雄 1957・湯浅幸孫 1979・池田秀三 1979・日原利国 1986・田中麻紗巳 1986、などの研究が挙げられる。中国においては、張覚 1998・李曉敏 2014・蔣沢楓 2014 などが挙げられる。
- (3) 以下志氏姓と略す。『四庫全書總目提要』儒家類一『潜夫論』「漢王符撰。符字節信，安定臨涇人。後漢書本傳稱，和安之後，世務遊宦，當途者更相薦引，而符獨耿介不同於俗，以此遂不得升進，志意蘊憤，乃隱居著書二十餘篇，以譏當時得失。不欲章顯其名，故號曰潜夫論。今本凡三十五篇，合敘錄為三十六篇，蓋猶舊本。卷首贊学一篇，論勵志勤修之旨。卷末五德志篇，述帝王之世次。志氏姓篇，考譜牒之源流。其中卜列，相列，夢列三篇，亦皆雜論方技，不盡指陳時政。范氏所云，舉其著書大旨爾」。
- (4) 現存の『風俗通義』に従う。
- (5) 「初，漢有鄧氏官譜，應劭有氏族一篇，王符潜夫論亦有姓氏一篇。宋何承天有姓苑二篇。譜学大抵具此。魏太和時，詔諸郡中正，各列本土姓族次第為舉選格，名曰方司格，人到于今稱之」。
- (6) 以下芸文志と略す。
- (7) 『世本』の概観に関しては『世本八種』出版説明参照。
- (8) 以下『箋校正』と称す。
- (9) 「太吉」は「太古」の誤りと考えられる。
- (10) 説明の便宜上、「引用先」欄で『箋校正』が引用している書名を示す。
- (11) 彭鐸校は「尚田」は「當」の誤りであると指摘している。
- (12) 唐の太宗の諱を避けるために「世」を「系」に作る。
- (13) 現存の『世本』輯本については、『世本八種』出版説明参照。なお、輯本については、荊泮林本を参照しているのは一般的である。
- (14) 李弘喆 2018 参照。
- (15) 「A 生 B」の形の系譜記載はあらゆる性格の資料に散見する。例として、敦煌写本「雜抄」「天地開闢已來帝王記 (S.5505・S.5785・P.2652・P.4016 の 4 点)，また、高橋継男 2005・金子修一 2009 に紹介されている唐代の杜嗣先墓誌が挙げられる。
- (16) 李弘喆 2020・李弘喆 2021 参照。
- (17) 「孔子年十七，魯大夫孟釐子病且死，誠其嗣懿子曰，孔丘，聖人之後，滅於宋。其祖弗父何始有宋而嗣讓厲公。及正考父佐戴・武・宣公…」。
- (18) 殿本作「宋考正父」，景祐本無。
- (19) 古今人表には「大金」に作る。
- (20) その詳細については吉本 2018 が詳しい。
- (21) 『世本八種』張澍粹集補注本輯参照。
- (22) 「閔公以下本世本，詩那疏引之，閔作潛。彼云，宋父生正考夫，文有脫減」。
- (23) 「服虔注曰，聖人謂商湯也。孔子六代祖孔父嘉為宋華督所殺，其子奔魯也」。
- (24) 以下『家語』と略す。
- (25) 「微子開，立其弟衍，是為微仲。微仲卒，子宋公稽立。宋公稽卒，子丁公申立。丁公申卒，子潛公共立。潛公共卒，弟煬公熙立。煬公即位，潛公子鮒祀弑煬公而自立，曰，我當立。是為厲公」。
- (26) 「孔子，宋微子之後。宋襄公生弗父何，以讓弟厲公。弗父何生宋父周，周生世子勝，勝生正考父，考父生孔父嘉，五世親盡，別為公族，姓孔氏。孔父生子木金父，金父生瞿夷。瞿夷生防叔，畏華氏之逼而奔魯，故孔氏為魯人也」。
- (27) 『十三經注疏正字』の作者は浦鏜ではなく、沈廷芳であるという見解もある。李慧玲 2008 参照。
- (28) その生涯については、顔真卿撰「朝議大夫守華州刺史上柱國贈秘書監顏君神道碑銘」参照。
- (29) 野間文史 1998 年，喬秀岩 2001 参照。
- (30) 実際に『左伝正義』には『世本』を引用する劉炫の疏文が確認される。即ち、襄二十九年「劉炫云，據世本，高止敬仲玄孫之子。不立止近親遠取敬仲曾孫者，齊人賢敬仲故繫之」。

- (31) 喬秀岩 2001 参照。
- (32) 表 3 に示されている『世本』佚文は全て荊泮林輯本に収録されている。確認した上で、荊泮林輯本に従う。文末の出典は荊泮林の注記であり、そのまま旧字体を使用する。
- (33) 子泉即子淵。唐高祖李淵への避諱である。
- (34) 『箋校正』は「呂」の誤りとする。
- (35) 『箋校正』は「終」の誤りとする。
- (36) 『箋校正』は「畢」の誤りとする。
- (37) 『箋校正』は「氏」の字が脱落しているとする。『姓氏急就章』注它氏の条には「楚平王孫有田公它成」が見えるが、関連性は明白ではないため、表に入れない。
- (38) 原文のまま。
- (39) 『箋校正』は「師」の誤りとする。
- (40) 『箋校正』は『世本』佚文を根拠として、「子革氏」とする。
- (41) 『箋校正』は「師」の字が脱落とする。
- (42) 「龔」に通じる。
- (43) 『箋校正』は「姫」の誤りとする。
- (44) 吉本道雅 2007 参照。
- (45) 「(建安) 五年 (二〇〇年) 春…時袁紹與曹操相拒於官度, 令其子譚遣使逼玄隨軍。不得已, 載病到元城縣, 疾篤不進。其年六月卒, 年七十四」。
- (46) 李弘喆 2019 参照。
- (47) 『後漢書』馬融伝参照。
- (48) 以下『釈文』と略す。
- (49) 『左伝』賈逵・服虔旧注については、同じことが言える。即ち後世の学者は賈・服の説は『世本』と矛盾しないことを根拠にして、賈逵・服虔が『世本』を参考したと解釈した。
- (50) 『後漢書』王充王符仲長統列伝参照。
- (51) 『後漢書』応劭伝参照。
- (52) 伝記なし。その生涯については、『淮南子』高誘注序参照。
- (53) 李弘喆 2018 参照。
- (54) 李弘喆 2019 参照。
- (55) 『漢書』楚元王伝参照。
- (56) 李弘喆 2018・2019 参照。

Consideration of the Genealogy Section of the  
*Ch'ien-fu-lun* [*Qian fu lun*] of Eastern Han China:  
Possible Relationship with the *Shiben*

LI Hongzhe

This paper approaches the nature of the “*shiji* 世記” [literally, “records of genealogy”] on which the Zhishixing 志氏姓 [genealogy] section of the *Ch'ien-fu-lun* is considered to have been based. To achieve the goal, the author looks into the relationship between the Zhishixing section and the *Shiben* 世本 [*Book of Origins*], considering the background to citing the *Shiben* in the Zhishixing section and the context of descriptions of genealogy during the Eastern Han Dynasty. Although the whole text of *Shiben* no longer survives, we have numerous examples of texts citing from the *Shiben* which allows us to approach its content.

First, the author collects all the citations from the *Shiben* in the *Ch'ien-fu-lun Jianxiaozen* 潜夫論箋校正 [*Correct Meaning of Ch'ien-fu-lun*], written by WANG Jipei in 1814, and analyzes their contexts and meanings. The author finds that the citations from the *Shiben* in the *Jianxiaozen* were in fact from other sources and denies a previous hypothesis that the Zhishixing section refers to the *Shiben*.

The author also compares genealogy of Confucius described in the Zhishixing section and genealogy of Confucius described in other sources citing from the *Shiben*. The author finds that some information was missing from the *Shiben* and demonstrates that what was missed was already confirmed at the time of compiling the *Wujing Zhengyi* 五經正義 [*Correct Meaning of the Five Classics*] at the beginning of Tang China. This leads the author to the proposal of a new hypothesis that both the Zhishixing section and the *Shiben* referred to the same sources for the genealogy of Confucius.

Furthermore, the author compares the descriptions of the relationships among families and clans in the “*shiji*” and the *Shiben*. As a result, the author finds that numerous pieces of information were shared between them and that no contradictions between them existed. While the author cannot be fully certain that these sources directly cite each other, no evidence exists to deny that these sources were related to each other.

Based on these considerations, the author concludes that the “*shiji*” the Zhishixing section refers to was not a single, particular book but a collection of various information and sources on genealogy during the Eastern Han Dynasty. The author's findings all contribute to the foundation of the philological study of the *Ch'ien-fu-lun* and its Zhishixing section.

**Keywords:** Ancient Chinese philology, Eastern Han, Early Tang, *Ch'ien-fu-lun*, *Shiben*, genealogy.